

Dialogue to the Public

(JR Yamanote Line, Tokyo)

30 October, 2012

**with
Kenji Kaijiya
Hu Fang
Atsushi Sugita**

Koki Tanaka

2012年10月30日(日)午後2時頃、JR山手線内回り品川駅発に、田中功起、加治屋健司、Hu Fang、杉田敦、齋藤圭吾、三宅拓也、高橋亜弓が乗車する。

駅構内アナウンス 東京、上野行きがまいります。ご乗車ありがとうございます。品川、品川です。お忘れ物ないようご注意ください。

品川駅 Shinagawa Sta.

田中功起 じゃあ、始めます。

加治屋健司 始めましょう。

田中 本日このトークを企画し、ホストを務める田中功起です。今回はこの東京を一周する山手線の中で三人のゲストにお話を聞きたいと思っています。まず最初は隣に座っていらっしゃる美術史家の加治屋健司さん。次が小説家でキュレーターのHu Fangさん。最後が美術批評家の杉田敦さんです。

まずは加治屋さん、よろしくお願いします。

加治屋 よろしくをお願いします。

田中 えーと、加治屋さんには少し歴史的な部分をお聞きたいと思って来ていただいたのですが、60年代・70年代に盛んであった、美術館の外、制度の外へ出て行った日本の前衛美術についてお話を聞きたいと思っています。

加治屋 はい。

田中 まずこの山手線はそもそもその日本の現代美術史上、重要な場所かなと僕は思っているのですが、それは後にハイレッド・センターを結成する人々が通称《山手線事件》というパフォーマンス・イベントをして、ちょうど今年で50周年。(この事実は)加治屋さんから聞いたんですけど(笑)

加治屋 そうですね(笑)

田中 今回は、彼らが行ったパフォーマンスの開始時刻になって、午後二時発の山手線内回りに乗っています。まずその通称《山手線事件》と呼ばれているブレ・ハイレッド・センターが行ったこのプロジェクトについて簡単にお聞きできたらと思います。

加治屋 はい。《山手線事件》と呼ばれているイベントは、今田中さんがおっしゃったように、ちょうど50

年前の1962年10月に行われたもので、品川駅から内回りで山手線を一周しようとしたというものでした。高松次郎、中西夏之、それから詳細は不明ですが、ウロボンKとK村田が参加しています。

田中 あ、そうか、赤瀬川さんは参加してないんですね。

加治屋 まだハイレッド・センターを結成する前なので、赤瀬川さんはいらっしゃらなかったみたいですね。

田中 ははは(笑)、そうだったんですね。

加治屋 招待状は受け取ったみたいですけどね。

田中 あーなるほど。

加治屋 彼らは一周する予定だったのですが、有楽町駅、東京駅、上野駅でパフォーマンスをして、そこで終わってしまいました。ただ、池袋から参加する予定だった小杉武久さんと刀根康尚さんは彼らに合流できなかったの、二人だけで音を出す行為を行って一周したようです。

田町駅 Tamachi Sta.

田中 ああ、そうなんですね。山手線に限らず、美術館の外で行ったいわゆるオフ・ミュージアム的な活動というのが当時いくつかあったと思うのですが。例えば僕の知る限りでは中嶋興さんとビデオアース東京の《食卓電車》があります。

加治屋 中嶋さんたちは地下鉄でやったんですね。

田中 あれ地下鉄だったんですね。

加治屋 はい。本格的に電車の中に食卓を持ち込んで、フライドチキンやワインボトルを用意して、車内でピクニックをするというものでした。

田中 ビデオを見た感じでは、隣に座っていた人とかが何となく巻き込まれてしまう、食事に参加してしまう(笑)

加治屋 そうですね(笑)。あの作品は75年のものですが、その前から電車や駅は、屋外で活動する際の重要な場所になっています。例えば、中村宏さんが「路上歩行展」をやったのは東京駅でした。

田中 そうですね。1964年ですね。

加治屋 64年の東京オリンピック開会直前の東海道新幹線の開通に合わせてやったんですね。

田中 そういうことだったんですね。立石紘一さんと

いっしょに「観光芸術研究所」として行ったということですね。

加治屋 そうですね。

浜松町駅 Hamamatsucho Sta.

田中 当時そういう動きがたくさんあり、その理由はいくつかあると思うんですけど、なんで彼らは美術館の中での、あるいはギャラリーの中での展示に飽き足らず、美術館の外へ出て行こうとしたんでしょうか。

加治屋 主な理由は2つあると思います、ひとつはジョルジュ・マチューというフランスの作家が1957年にアンフォルメル絵画の公開制作をするんです。それに刺激を受けて、日本の作家たちが公開制作、つまり出来上がった作品ではなく、それをつくるプロセスを見せることに関心を持って、50年代末から作品制作を見せるパフォーマンスをしていくんです。もう1つの流れとしては、1963年を最後に読売アンデパンダン展が終了してしまうんですね。当時の現代美術の作家にとって、読売アンパンは数少ない発表の場所だったんですが、それがなくなってしまったので、美術館の外に出て行ったということも挙げられると思います。

田中 実際「オフ・ミュージアム」という展覧会を篠原有司男さんが(1964年に)企画したんですね。

加治屋 はい。ただ、あれはオフ・ミュージアムって言いながらも、椿近代画廊というギャラリーで開いたところが皮肉ですね。

田中 オフ・ミュージアムと言いつつ、ある種の空間を必要としたということですね。

加治屋 そうですね。

田中 山手線や東京界隈の駅以外にも、例えば多摩川もオフ・ミュージアム的な活動において重要な場所のひとつだったのではないかと。もしかしたら複数の美術大学が近かったとか、いろいろな理由があり得ますが、何かその空間的な広さがアーティストにとって良かったのかもしれないし、東京という都市から少し離れて自然の中に入り込んで何かをするっていうこともあったのかなとも思うのですが、そのあたりどうですか。

新橋駅 Shinbashi Sta.

加治屋 多摩川だと1964年に、先ほどの中村宏さんと立石紘一さんが「観光芸術」展という一日だけの展覧会をやりましたね。

田中 一日だけだったんですね。

加治屋 あれは、先ほどの読売アンデパンダン展が中止になって、準備していた大きな作品が出せなくなったので展示することにしたようです。

田中 出せないからという理由だったんですね。

加治屋 はい。それから、高松次郎さんの《石と数字》という作品もありますね。多摩川の河原で石に数字を書いていく作品です。

田中 あと、山中信夫さんの…。

加治屋 山中信夫さんは二子玉川で、川を写したフィルムを川にまた映写するという作品を1971年につくっていますね。あの頃、多摩美術大学は上野毛から八王子に移るところで、多摩川が近かったということもあったと思います。この後、都市空間よりも郊外や自然環境の中で作品を見せることに作家たちの関心が向かっていきます。

有楽町駅 Yurakucho Sta.

田中 70年代、もの派で言えば、関根伸夫さんの《位相一大地》は屋外制作ですね。

加治屋 《位相一大地》は68年10月に、神戸須磨離宮公園で行われた展覧会でつくられた作品ですね。

田中 やはり60年代70年代通って、そうしたオフ・ミュージアムの活動が盛んだったというか…。

加治屋 ただ、関根さんの場合は、あくまでも野外彫刻展という展覧会の枠組みの中で制作されたものですね。あと菅木志雄さんの《状況律》も、宇部の展覧会で発表されたものです。

田中 そうしたものは制度の外というよりは、むしろ制度の内側で…。

加治屋 野外彫刻展という制度の中で発表されたものですね。

田中 もしかすると70年代に入って、逆に言えば屋外で作品を発表するということはある種、制度化したと

言えるのでしょうか。

東京駅 Tokyo Sta.

加治屋 どうでしょうね。反芸術パフォーマンスのような社会批判的なものは、70年代以降少なくなっていますが、屋内で発表するほうが評価されるようになったわけでもないの、一概に制度化したとは言えないんじゃないかな。

田中 僕自身の個人的な興味として、ある種の制度批判的な身振りとして美術館の外に出て行ったアーティストの活動に関心が多少あるんです。

加治屋 ああ、そうか。

田中 そういう身振りを持っていたものって、実はそれほどなかった…。

加治屋 たしかに60年代は、美術館の外に出ることに大きな批評的な価値がありましたよね。

田中 70年代以降はあまりそういう動きはないのでしょうか。

加治屋 70年代、高山登さんや榎倉康二さんたちは「スペース戸塚」や「点展」という展覧会を行っています。展示作品の多くは仮設的なもので、商業価値から外れているわけですが、大文字の美術に対する批判というよりは、もっと内向的なものだったのではないかと私自身は考えています。

田中 プライベートなものとして…。

加治屋 プライベートに、自らのうちにある美術の観念をいったん解体して再構築しようとする側面が強かったのではないかと考えています。

神田駅 Kanda Sta.

田中 なるほど。50年前に、日本の、東京を中心に起きたそうした美術館の外に出ていくアーティストたちの活動に、ぼくはどこかで親近感をもっているところがあり、この山手線のトークは改めて彼らの活動を振り返る機会にしたいと思っていたんです。加治屋さんは、このトークについてどのように感じますか？

加治屋 現在、日本の戦後美術を振り返る作業は盛んになりつつあります。今度 MoMA が「東京」展をや

ますし、私も関わっていますが、MoMA から戦後日本美術論集 (From Postwar to Postmodern, Art in Japan 1945-1989) も刊行されます。こういう歴史の検証作業は、普通はキュレーターや研究者が行うものですが、アーティスト自身がそれを手がけるというのはすごく面白い試みだと思いますね。何ていうのかな、従来だったら、それはパロディとかパスティッシュだったんだろうけれど、それとは違う感じがしますよね。当時の文脈のなかであり得た可能性をアーティストなりの視点で考え直すというのは、キュレーターや研究者の仕事とは違った重要な意味があると思います。

秋葉原駅 Akihabara Sta.

田中 確かに90年代にもスモール・ビレッジ・センターという、小沢剛さん、村上隆さん、中村政人さんの活動がありました。例えば村上三郎の紙破りを村上隆さんが行うというような。学生の頃に美術手帖で知って、当時はパロディ、あるいはポストモダンの身振りというか、そういうものとして行われていたのかもしれませんが、村上さんと中村さん、小沢さん、個々の活動の中でも、特にぼくの中で印象に残っていて。ハイレッド・センターを模してスモール・ビレッジ・センターと名乗り、なおかつハイレッド・センターに限らず日本現代美術史を身体を使ってふり返る。でも今、加治屋さんが言ったように、ぼくもこのトークを単なるパロディとしてやりたいとは思っていない。例えば《山手線事件》を模して、ドーラン塗ってパフォーマンスをすることもできるわけですよね。当時の資料を頼りに。

御徒町駅 Okachimachi Sta.

でも、どちらかというと中間的な立場で行ってみたい、もちろんアーティストとしてなんですが。例えばぼくの場合は、テキストを書いたりすることや美術史的な興味と同列のものとしてこの山手線内のトークをしたい。これは東京都現代美術館での出品作品という位置付けですが、そこに収まりきらないというか、個人的な関心の方が実は大きいですね。その意味で、是非とも加治屋さんに話を聞きたかったというか。

加治屋 60年代はいろいろなアーティストが美術館という制度を批判してその外に出て活動を行ってきました。その意義は歴史の中に消えてしまったように見えるんだけど、実は、彼らの試みというのは、美術の現場が多様化している今日、非常に重要になってきていて、それをキュレーターや研究者だけではなく、アーティスト自身が自分の作品を通じて考えていくというのはとても意味があることなんじゃないかと思います。

田中 ありがとうございます。あ、ちょうど上野だ。

加治屋 ちょうど上野ですね。

田中 びっくりな終わり方(笑)。ありがとうございますしました。

加治屋 はい、ありがとうございました(笑)

田中 次は…。

加治屋 どうしましょう、席替えしますか？

杉田敦 変わった方が良いんじゃないですか？

田中 そうですね。じゃあ、Hu Fang, Can you come here? ここここを入れ替えて。

全員 (笑)

上野駅 Ueno Sta.

Koki Tanaka People are wondering why these guys are talking (in the train).

Fang So we don't need to move to another compartment?

Koki We just stay here to talk.

Fang OK.

Koki Thanks for joining this talk-project at JR Yamanote Line.

Fang You're very welcome. I'm very glad to be here.

Koki We've already, let's say, talked many times since we first met a long time ago, and somehow we still keep discussing, when we meet like this. And all of these talks we have are connected, I think. One of the reasons why I'm doing this project with you is because I remember the last time we met in Tokyo we took the subway from somewhere like Ginza to Nakameguro and we just kept talking in the train.

And I realized that this kind of talks might be more interesting than the other types of regular artist talks in a museum. So then I decided to try and use this idea for my project here. Obviously, there is a historical reference that I discussed with Kenji just before about Hi-Red-Center, but this also retains some meaning for our present right now. And when we e-mail exchanged some ideas about this, you also told me like you'd want to talk a little about the land by Sepp Holzer, which you've recently visited. Do you still want to talk about this?

鶯谷駅 Uguisudani Sta.

Fang Probably I would like to do some improvisations regarding what we're going to talk about today, since we are not intending to fix one topic for today's conversation. And I think that's probably

one of the reasons why we are thinking to have a conversation here. Maybe it's more interesting to think about how this situation has unconventional inputs to re-connect with lots of happenings in our life, for example, by connecting the day when we last had a conversation in another train in Tokyo some time ago, or by connecting it with what I was doing this morning.

Koki OK.

Fang And then also maybe if we think about what happened 50 years ago, not only about the "Yamanote Line Incident", but rather about a kind of crossing of different dimensions of time and space, and how this gives back the energy of our presence here in this moment - I find this is actually quite amazing - Because it's very dense, it's very concentric, meanwhile it also gives us some changes to move out from our daily routine. If we look at what's happening here now, I think we can discover a lot of changes around us - a constant change of social

日暮里駅 Nippori Sta.

Somehow, what we are experimenting is a way to feel the strong connection of time and space under a specific method, which could transform daily life into a moment of creating intensity of perception. Actually it's quite interesting; I started to have T'ai Chi practices in the early morning, I try to do it as...

Koki Everyday?

Fang ...I try to do it everyday and even if it's not possible to do it everyday, I still try. I consider this more like a way of getting a sense of the daily accumulation of energy, within certain form of daily practices - of course it's not so easy to exactly define the form - you can actually try to receive energy from the surroundings and then give back this energy to others.

西日暮里駅 Nishi-Nippori Sta.

Koki I think the Yamanote line is a kind of a symbol of Tokyo. Being it a circle train, as if it never stopped, it's almost like a perpetual motion machine for people living in Tokyo. This circle is also symbolic meaning for me. When I am back in Tokyo, I feel like loosing a lot of my energy. Probably because everyday I'm like having meetings, working and doing many things, taking care of whatever I should do here. And in this time also I've been very busy since I came back to Tokyo few months ago - people are under pressure to do hard work here. However, you told me before that when you come to Tokyo, you feel 'calm', which is totally the opposite of this feeling of mine when I'm in Tokyo.

田端駅 Tabata Sta.

Somehow you feel certain silence in Tokyo maybe because you escape from your busy life? But strangely enough, I also understand feeling 'calm'

from being in Tokyo. In a sunny day I wander the city without any purpose time to time. This gives me certain silence of the city and feeling 'calm'. So sometimes I loose my energy here, but sometimes I accumulate my energy here in Tokyo. And this 'busy and calm' cycle reminds me Yamanote line. This is a very busy train in a rush hour but daytime, like now, still a bit busy but somehow I feel 'calm' here.

Fang From my experience in Tokyo, the silence probably is also related to the situation that basically you don't understand what other people are talking about, so that in the end you can stimulate your other senses to feel the environment, you don't need to talk too much, and you actually get lots of energy back.

Koki I see.

Fang And I think actually if talking is a way to exchange energy, then it naturally requires and produces its specific and original contents. It's interesting that we are thinking about the Yamanote line as a kind of circle around the void.

Koki Yeah, We are circling around the void...

Fang I would imagine that what we are doing here could become a part of the daily practices taking place in a invisible way, not as a special event.

駒込駅 Komagome Sta.

...and I feel that we are actually doing some kind of test, which probably is not meant to be too visible to people around us. I realized here in Tokyo that basically people are not doing much conversation in the train, I guess people probably reserve their own space for themselves or they just feel tired after work, so it's more interesting to see this kind of overlapping of situations, which produces its specific form of circulation of energy, eventually going beyond its physical time, physical space, and it connects with historical events in a non-physical way.

Koki That's true. The original 'Yamanote Line incident' was more like a performance event, so they were physically doing something. But our revisiting of this historical event is not only about physicality but it's more like about an idea and also about opening our sensibility.

巣鴨駅 Sugamo Sta.

Fang It is also a kind of suggestion of having daily exercises, right?

Koki Yeah, because sometimes when we take a train, we can hear someone talking about something that we never thought before, and we can draw inspiration from someone else's talk. So there is also a possibility that our talk might connect to someone else in this train but this is not only about others, it's also about us because today we are really conscious about how we're talking inside a train. Then I think our perception has been bent by this project. And then we become more conscious about how we talk and what we talk about.

Fang I think I will have a very different memory of the Yamanote line after this trip and will have a new understanding of what is the possibility in our daily life. I have been interested to examine how we can raise up daily consciousness through a different thinking and different methods, and at the same time my experience here makes me think about some kind of practices in between a performative approach of daily activities and real daily actions but not necessary to be "performance"; and talking about performance in the context of subway made me suddenly recall The Sarin Gas incident...

大塚駅 Otsuka Sta.

Koki Are you talking about The Sarin Gas Attack by Aum Shinrikyo religious group in 1995 in Tokyo?

Fang Yeah, I don't want to recall the very sad

memory of this tragedy taking place in the subway, but The Sarin Gas Attack was an extreme way to deliver a statement to the public and actually it was an extreme case of social performance. I know it's quite complicated to compare a social performance with an artistic performance, and this is not the place to talk about it in a comprehensive way, nevertheless, it seems that performances are intended to deliver a strong statement to the public and quite often they become power in people's hands, whereas my concern is whether there is a new form of action that is not necessary giving a statement and forcing the others, but rather leaving space for the others, as well as for oneself.

池袋駅 Ikebukuro Sta.

Koki When I decided to do this project few months ago, I already, let's say, changed my sensibility in a way. Because it has affected me for a while - every time when I take a train with someone, and talk about something, each talk, this regular conversations become related to this project.

Fang They become your laboratory.

Koki Yeah, and this project is not publicly announced, to get audience from the museum. This project is related to a specific museum show but the time and place of the event are not announced to the museum audiences. So the audiences, who go to see the show in the museum and get some general information without any details, know that we are going to do this talk on the JR Yamanote line but they don't know how that we are doing it right now. Even if there were only an announcement about a public talk on a train, I think this idea would give people some consciousness of listening to other passenger's talks happening in a train. So the museum audiences don't need to come here, the idea is already creating a small change in their mind. It's just a small change for them but some could

probably understand and somehow naturally they could perceive other people's talk in a train as an anonymous art performance, and it could be even more than an art performance, they could become their daily practice. Taking a train is our daily routine; every talk in a train could become something else if we wanted to.

目白駅 Mejiro Sta.

Fang You see people around here, they don't care about us, which is a very beautiful thing for me. I was thinking how the communication somehow could stay in its own way without necessarily getting an immediate reaction from people but rather just staying as it is, and flowing...

Koki Yes, our talk somehow returns to our daily life.

Fang So I think probably we can talk a lot about today as an ordinary day, as well as a day trying to extend to other layers of time and space.

Koki …あれ？ここ、高田馬場？

Fang OK, So...

Koki This is the place to change to the next guest...

Fang It's nice to have a time limit.

Koki Yeah!

All (laugh)

高田馬場駅 Takadanobaba Sta.

田中功起 最後の杉田さんとのセッションを始めたと思います。えーと、もうどこかで、なんというか、気持ちが慣れてますよね（笑）？

杉田敦 そう、どこかでねー。慣れてるんですよ。

田中 ばくもなんか慣れてるんですよ。

杉田 なんだろうね。なんか失ってるよね。

田中 何かを失ってますよね。

杉田 失ってるー。

田中 ばくら二人は二週間ぐらい前の10月18日、ちょうどオリジナルの《山手線事件》の行われた1962年から50周年目の日に、リハーサルと称して、実はあっち

が本番だったかもしれないなどと言いながら、同じ流れのトークを山手線内でやったんですよね。まずその時と今日の違いみたいな話からしてみましょう。

杉田 うーん、なんか、圧倒的に違いますよね。

田中 違いますね。

杉田 完全に慣れちゃって、今回はなんとなく時間の感覚とかも分かったりするんだけど、あの時は本当にわかんなくて、大分早かったですよね。

田中 そうですね。なんか気持ちが焦ってしまっただけ。ぼくは乗った瞬間に「ああ、座れない」とまず焦って。「立ちながら、なんだなあ」と思いつつ、杉田さんと話し始めて、電車が動くので外の風景もどんどん変化していくじゃないですか、そうするとなぜか時間がどんどん早く過ぎていく気がして、もっといっぱいしゃべらなきゃいけないかと思って、また気持ちが焦って。

杉田 そう。なんだか全然しゃべった感覚が残ってなくて。

田中 今日は2回目ということで、気持ちが慣れていて。どちらかというとのことを気にせず会話に集中できているというか。車窓の風景が変化していこうが、次の駅に着こうがあまり気にしない状態になっちゃってますね。

新大久保駅 Shin-Okubo Sta.

杉田 この前は聞いて咀嚼して話すことが難しかったので。Hu Fangと並んで立ちながらさっきまで話していたんだけど、実際やってみてどうですか、「ゴイング・パブリック」って。

田中 言ってみれば、パブリックに出ていく時に、パブリックと交流するとか、エクスチェンジするみたいな意味合いが含まれていたりするじゃないですか。日本でいえば地域プロジェクトというものがあり、特定の地域／地方に出て行って、そこで地元の人たちと何かして、いってみればコミュニティ・ベースの作品を作る。そういう意味でのパブリックなものもあると思うけど、僕の場合は投げっぱなしというか。あまり目に見える交換がない。このダイアローグは基本的にこの車内に偶然いる乗客に向けてやっているもので、この電車にいる人たちは必ずしもいつも美術館にくるようなタイプの人たちとは限らないし、そもそも彼らに

はまずこのトークの情報が与えられていない。もちろんこの人たちに何かをして欲しいわけでもないし、目に見える反応がほしいわけでもない。ただ、とはいえ何かしらの関係がこの車内には生まれるだろうと思っています。同じ車両内で同じ時間を一緒に過ごしているので、それが実際にどういう影響があるのかどうかは別として、そのことだけでもいいのかなって僕は思っています。まずパブリックな場所に行き、目に見える交流を目指すのではなく、その場に一緒にいる。

新宿駅 Shinjuku Sta.

杉田 さっき、Hu Fangと話していて彼が言っていたのはこれをそのまま北京でやったらどうなるんだろうと。そうしたら多分、違ったものになるだろうと思うって言っている。

田中 あー。そうですね。

杉田 北京でやったらこうワットと人に囲まれて、みんな話してくる(笑)

田中 向こうから(笑)

杉田 そう、だからHu Fangは絶対参加したくないって(笑)、あー、そうかもしれないなあって。

田中 そうか、その通りでしょうね(笑)

杉田 ちょっとでも話し声が聞こえたら囲まれるって。そして、わーって寄ってきてあれこれ言いだす。このへんでこうやってやり取りするより、別のタフネスが要求される。

田中 もしかするとアメリカでもそういう反応かもしれない。

杉田 かもしれないですね。

田中 例えば以前アメリカで驚いたのは、エレベーターに乗り合わせると、みんなまずは「Hi!」ってお互いで軽めにあいさつをするというか。おそろくなんていうか、敵じゃないですよっていうのを示すためにまずはあいさつするんですよ、きっと。だからたぶん、このトークのような状況を作ると、この人たちは何だろうって思うので、気になるならまずは先に話しかけてくるか、きっと向こうから微笑みかけてくるか。東京とはまた別の反応がきっとあるはずで。

杉田 そういう意味では、なんか分かんないんだけど、

《ベインティング・トゥー・ザ・パブリック》で絵を持って街を歩いたものが分かりやすい。要は視覚なのかな？

田中 そうですね。

杉田 見るだけでも、参加できてる感じがある。さらされているということに対して、自然に意識できる。向こう側の人たちとも、なにかコミュニケーションがあるような気がする。言葉だと、本当にはないよね。

代々木駅 Yoyogi Sta.

田中 そうですね。あと、基本的に電車の場合、ぼくらは品川駅から乗ったわけですが、一周して品川駅に着くまでに乗客は必ずどこかで降りてしまって、ずっと同じ車両にいてことはまずない(笑)。そうすると、ぼくらの話している言葉は乗客にとって断片的になってしまう。だからもしかするとどこかでこの話が聞こえていて、あるいはより意識的に聴こうとしている人がいたとしても、その人たちは必ずこの会話の断片しか受け取れないので、そういう意味では確かに一瞬で何をしているのかが分かる「絵画を持ち運んでいること」とは圧倒的に違う。

このプロジェクトを通して、出来事の経験の複数化、作品の経験の複数化ということを実はちょっと考えていて。このトークは後に、録音されたものを文字起こして、冊子にする予定ですけど、例えばそれは美術館の中で手に取れるようにします。その冊子を美術館の中で手に取った人たちは、この山手線一周の間の会話全体を把握できているように感じるわけですよ。たとえば記録の写真もあったりして、twitterにも記録が残っていたりして。そうすると全体を把握したように感じているけど、実はこのトークの大部分が抜けているという。それは、このトークは、偶然この車両に乗り合わせた人にとっては断片的な経験でしかなかったという事実。その「偶然性」が冊子を読むことからは抜けている。でもこうして今、「偶然性」を経験している乗客は、これがなんであるの分からないまま、その断片しか経験できず、全体がわからないわけで。美術館の中で冊子で経験する人も、今一緒に乗客として電車内で経験している人たちも、どちらも「全体」が「偶然」を欠落したまま、別々の経験をせざるをえ

ない状況になっていると思います。

杉田 この間リハーサルをやったときにちょっと考えていて、近いのかなと思っていたことがあって。それは今言った経験の話でいうと、今年のドクメンタに行って、ぼくら全部は経験できてないわけじゃないですか。

田中 ああ、ぼくも全部、見れなかった。

杉田 『New York Times』かどこかで、70%はつまらないアーティストだったけど、残り30%は面白かった。でも全体としては面白いて書かれていたみたい……。

田中 あー。

原宿駅 Harajuku Sta.

杉田 なかなかね、それについても考えさせられる。何か展覧会に行って、MOTアニヴァーサルでもいいんだけど、個別の何かが面白いていう語られ方ももちろんあるんだけど、何がそこで、見せられているものもそうだけど、あるいはアーティストが隠していたり、アーティストが意図的に遠ざけていたりするものとか、そうした全体を受けて面白いていう感覚もあるじゃないですか。

田中 そうですね。

杉田 それがなぜか、専門家になっていけばなっていくほど、そうではなくなる。個別のことに介入して、こう感じたというようなことになっていく。そういう、あいまいな経験みたいなものを受けながら判断していくという部分がないがしろにされちゃう。実はそのへんが、最終的なトークのテーマとなっている政治と関係している。経験自体が曖昧な状況でも話せると思うし、それこそを話すべきだと思う。でも、ある種の専門的な活動について話すということになっちゃう。2011年の横浜トリエンナーレのときに田中さんの展示スペース内でトークをさせてもらったんだけど、なんなんだろうこれかと思いつながらやっていた。あの宙ぶらりんなところにいる意味ってどのようにもとれて、アートの内省とも取れるけれども、まったく別のものにもとれる。そうした体験ってすごく大きくて、ああいうことを積み重ねてゆくことって実はすごく大切な気がする。

渋谷駅 Shibuya Sta.

田中 さっきお昼を食べながら打ち合わせをしていた時に、個別の作家のことをばくも話していたじゃないですか。今回のMOTアニヴァーサル（「風が吹けば桶屋が儲かる」）に出ている人たちの作品をあだ、こうだと言いつつ、評価したり批判したりする。でも展覧会全体として見たときには、とても意欲的なものに見えるてくるというか。

杉田 なんかぼくの中でそれをずっと思ってたわけじゃなくて、ぼんやり思っているのでもいい加減でもあるんだけど、さっきキュレーターさんの西川さんの役割が大きかったという話がでていたと思うんだけど、それもしかしたらちょっと言い方がずれるかもしれない。全体を、個々の作品とか構成を、こういう風にしたい方がよいねってやり方を上手く説明できなくて、西川さんいいよねって言い方にしたい方が言いやすくて、そうしているのかもしれない。

田中 展覧会に見にきた人たちは、例えば他のキュレーターたちは、物が無いようなタイプの作家ばかりを集めたんだよね、みたいな、言ってみれば紋切型な表現でカテゴライズして、判断してしまう時がある。その個別の作家を論じて、どれが良かったとか、どれがダメだったみたいな言い方もそうですけど。どうしてもカテゴリーとか、あるいは作家個人に帰結させるというか。でも実際、ぼくにしても、きっと他のアーティストにしても、その作家が自身の能力によって決めている、あるいはその決断から見えてくる「作家性」みたいなものって、実は本人たちがそんなに意識的に選んできたものではないかもしれないですね。

杉田 ああ、うん、そうだね。

田中 キュレーターとの協働だったり、このプロジェクトだったら杉田さん、加治屋さん、Hu Fangと話をするってことなので、これが作品としてどうかっていうのはばく自身の問題だけではないというか。

恵比寿駅 Ebisu Sta.

もちろんばくの依頼によって成り立ってはいらるんですが。これには「end result」（結果としての作品）みた

いなものが曖昧で、それに今この瞬間の状態っていうのは、きっとぼくが最初にイメージしていたこと、というよりそもそもこうしたいっていうイメージがなかったわけで、となるとこの今の状況の在り方を自分が選んだのかと言えば、選んではないのかもしれないあと。

杉田 なんかそれは、ぼくにに感じているところもあります。わかんないんだけどぼくが思っているのは、田中さんの作品というプロジェクトに参加して、このまま例えば田中さんの展示を見に行っただとして、自分のポジションが明確に見えるのかなと疑っている。リハーサルが終わった後にお茶を飲んでいて冗談ばく話をしたんだけど、MOT アニュアルを見に行かないっていうのもありえる展覧会経験のひとつのような気がする。ぼくににとって今回の内容はここだけになってもいいような感じがしている。例えば、間接的に（展覧会の内容を）、他の人から聞くのもいいかなって思ったりしている。さっきも他のアーティストの話をしていたときに、他のアーティストのことを気にせず思ったことやればいいのってということ話したじゃない。そうやって展覧会の中で、他のアーティストの出方との関係で自分の作品を決めるっていうのは、それはなんだろうな、ドクメンタでもあると思うけど

田中 ありますよ。それは絶対あると思います。

杉田 そう、あるんだけど、同時に、それでも必ず明確になんとかみんなそれぞれある種の意思表示が出来ているような気がする。そこはなんかちょっと違うかなって思っている。さっき、ここに来る前に田中さんが見せてくれた吉岡洋さんのブログ記事「アートにおける政治的なもの」(<http://chez-nous.typepad.jp/tanukinohirune/2012/09/アートにおける政治的なもの.html>)で述べられている、政治的でないっていう身振りの政治性みたいなものとも関係するんだけど、ぼくはちょっと違うような感じがしていて、やっぱり「政治性」を意識しているかどうかということが大きいような気がする。

田中 あー。

目黒駅 Meguro Sta.

杉田 だから例えば、悪い言い方だけど民衆は非政治的な態度を示しているんだけど、それこそ政治的なんだよって言うてしまうのは一種の高みからの目線で、そのなかでのひとりのアクターとして動いている身からすると、全員の無意識の政治性みたいなものは感じることは出来なくて、漠然と政治的なものについて語らない人々がいるよ、と感じちゃう気がする。これも結論ない話なんだけど（笑）。そういうことも全部絡んでいるのかなって感じがしている。

田中 そうですね。前のリハーサルのときには、ぼくも焦った勢いで政治的な身振りが自分の作品で出すのはちょっと苦手だ、みたいなことを言いましたよね。でも実はそこまで思っていなくて（笑）。いや、でもやっぱり言ったってことはそうかもしれないけど。日本に帰ってきて感じたある種の空気感というか、そういうものの影響がどうしても出てしまうのかも、そんな気がします。ぼくの今回のいくつかの東京都現代美術館でのプロジェクトが政治的かどうかという判断はそれぞれ、それを見たり聞いたりした人の判断だと思うんですけど、少なくとも日本にいた4年前にはやらなかったことをして。こんなに制度の問題を自分が展覧会の中でやるとは思ってなく。でもなんというか、制度批判的なことを制度の内側でやるんだったら意味ないよ、みたいな、なんかそういう日本の風潮もあるじゃないですか。

五反田駅 Gotanda Sta.

杉田 あるね。

田中 政治的なものも必要だとアーティストも分かっているけど、でも同時にどこかでどうせ社会は変わらないでしょって思っているような。制度の問題をわざわざアーティストがやる必要はないよねっていう風潮というか、そういうある種の同調圧力みたいなものがあるって、だからいままでの自分だったら、その気分に萎えてたぶんやらなかったでしょうね。今回はある意味、全面的に制度問題押しというか（笑）。それがどこまで伝わっていくものかはわからないけれど、少なくともアーティストとしての態度を見せるということ、ぼくはそれが特に重要なことだと思って。もちろんー

方で作品そのものはいろんなレベルにおいて作っていくので、そのひとつひとつにアーティストの態度が表れるだろうけど。どういう風に受け取られようが、少なくともそういう身振りは必要なことだと。そこにあるいは政治的な態度も含まれるべきかなあとも思います。

あともう一駅くらいですね…。

大崎駅 Osaki Sta.

杉田 なんかさっき面白いな、いいな、と思ったのが、この電車に乗る前にMOTアニユアルの話をしてくれて、あの展覧会はいいいところもあるけれど、ものすごくいいんだけどダメなところもあるって。でもその良さはドクメンタと比べたらどうかかって話。ぼくは、そうした感覚は本当に持っていてほしいなって、みんなに対して。みんなに対してってすごく偉そうなんだけど。なんでみんな、そうした感覚があんまりないんだらうって。

田中 そうですね。でも、もちろんドクメンタだから良かったわけではなくて、ぼくは前回のドクメンタ12も見に行ったんですが、展覧会全体としてはほんとにがっかりしてしまっ。

杉田 あー。ぼくもがっかりした。最悪だよな。

田中 そうそう(笑)。ドクメンタだからいいっていう単純な話でもなくて。いい展覧会があって、そのいい展覧会の経験はやっぱり残っているじゃないですか。例えば「14のタベ」っていう、毎夜一晩限りのパフォーマンスの連続企画が今年の夏に東京国立近代美術館であって、ぼくはその一部しか見られてないけど、それと比べたときにこの展覧会はどうだったんだらうかというか。そういう良かったものの記憶と今起きていることを比べて。もちろん、今回のMOTアニユアル全体は結構面白かったけど、とはいえ、自分が今までにいいと思った展覧会と比べたら、じゃあ、どう見えるんだらうか。

さっき杉田さんが言っていた、もしかしたらMOTアニユアルを見に行かないかもしれないという話、最後に関連づけると、ぼくは今回、美術館にはほとんど何も展示していないんですけど。だから「見に来てください」と素

直に言えないんですね。それはぼくらがこうして山手線内で話したりするような、展覧会の外の活動に重きを置いているからでしょうけど。展覧会に参加していながら、展覧会の外にいるような、今までにない経験をしています。展覧会自体は面白いので見に来てほしいけど、でも一方で、逆に見に来ない人の方がぼくのこうした外の活動／作品を理解できるんじゃないかとも。だから展覧会を見られない人、来ない人たちって、なんかそれは、それぞれの人の実感としても、美術館の外に、展覧会の外側にいるわけで、その経験にも可能性があるというか。

杉田 これ、ずっと動いて話をしてきたけど、止まって話す予定はないの？(笑)

田中 ははは(笑)、降りてってことですか？

杉田 うーん、なんか止まって話すこともどっかでやりたいよね。

田中 そろそろ止まって話したい(笑)。この焦った空間じゃなくて。

杉田 うん、焦ってるよね。

田中 やっぱり最後はちょっと焦ってきちゃう(笑)。そうですね、次はもうちょっと止まった形でダイアログ・トゥー・ザ・パブリック。

杉田 そうだね。いいかもしれない。

田中 新宿とかでやってもいいかもしれない(笑)

杉田 うん。じゃあ、降りますか。

田中 そうですね。ちょうど品川駅ですね。

田中 Hu Fang, Let's get down.

Hu Fang OK.

全員 (笑)

品川駅 Shinagawa Sta.

JR山手線をひと周した午後3時頃、田中功起、加治屋健司、Hu Fang、杉田敦、齋藤圭吾、三宅拓也、高橋亜弓は品川駅で下車する。



このリーフレットは、展覧会「MOTアニュアル2012 Making Situations, Editing Landscapes, 風が吹けば桶屋が儲かる」(東京都現代美術館、2012年10月27日(土) - 2013年2月3日(日))における田中功起《ダイアログ・トゥ・ザ・パブリック (JR山手線)》の記録として発行されました。

Published on the occasion of exhibition "MOT Annual 2012 Making Situations, Editing Landscapes" at Museum of Contemporary Art Tokyo from 10/27/2012 to 2/3/2013 as a part of the project by Koki Tanaka "Dialogue to the Public (JR Yamanote Line, Tokyo)".



発行 | Published by
東京都現代美術館 Museum of Contemporary Art Tokyo

編集 | Edited by
高橋亜弓 Ayumi Takahashi
田中功起 Koki Tanaka

英文校正 | English Proofreading
ルイザ・トレスカ Luisa Tresca

デザイン | Design
牧寿次郎 Jujiro Maki

撮影 | Photo
齋藤圭吾 Keigo Saito

印刷 | Printed by
シナノ書籍印刷株式会社 Shinano Co.,Ltd

© 2013 Museum of Contemporary Art Tokyo and Koki Tanaka



田中功起
ダイアログ・
トゥー・ザ・パブリック (JR山手線)

2012年10月30日

パブリック・スペースでのトーク
JR山手線が一周する間 (約1時間)
トーク参加者: 加治屋健司、フー・ファン、杉田敦、田中功起
記録写真: 齋藤圭吾
記録冊子デザイン: 牧寿次郎
アシスタント: 三宅拓也、高橋亜弓
(リハーサル 日時: 2012年10月18日、参加者: 杉田敦、
西川美穂子、田中功起)

Koki TANAKA
Dialogue to the Public
(JR Yamanote Line, Tokyo)

30 October, 2012

Public Talk

duration: about one hour while a train goes around Tokyo

participants: Kenji Kajiya, Hu Fang, Atsushi Sugita
and Koki Tanaka

photo documentation: Keigo Saito

leaflet design: Jujiro Maki

assistant: Takuya Miyake, Ayumi Takahashi

rehearsal: 18 October, 2012 (50th anniversary) by Atsushi Sugita,
Mihoko Nishikawa and Koki Tanaka

MOT
making situations
東京駅現代美術館

MOT ANNUAL 2012
制作状況の記録
Making Situations, Editing Landscapes